

①

「人間になりました子ぎる」

脚本・画 安藤邦緒
あんでうくに お

田植えを終えたおじいさんとおばあさんが、
お昼ご飯を食べようとしています。

おばあさん 「じいさんや、わたしらがつくったお米でに
ぎったおにぎりを食べなされ」

おじいさん 「おお、いただくとするか」

二人の話を聞いていた子ぎるのムッチに、
すずめがささやきました。

（小さな声で）

すずめ 「あのおじいさんとおばあさんは田んぼを一
枚しか持っていないの。しかも小さいのよ。
でもすずめたちの間では、あのおじいさん
たちがつくったお米がいちばんおいしいと
評判よ」

ムッチ 「ふうん、おいらも食べてみたいなあ」

— ぬく —

②

ムッチはこっそり近づき、おにぎりを一個
うばって逃げました。

おじいさん

「こらあ！ どろぼうやめー！」

おじいさんが怒っています。

ムッチはおにぎりにかぶりつきました。

（大きい声で）

ムッチ

「わあ、うまいやー！」

— ぬく —

③

おじいさんとおばあさんは時間があると、
田んぼに来ては、草をひいたり、稲を食べる
虫をとりのぞいたりしています。

夏になり、お米になる稲穂が出てくると、
おじいさんはすずめに稲の実を食べられない
よう、毎日、朝早く田んぼに来て、夕べま
で番をしています。

— ぬく —

秋が来ました。おじいさんとおばあさんの田んぼに、お米がびっしり実りました。

ある日。ムッチが田んぼに來ると、おじいさんでなく、違う人が立っています。

ムッチ

「おじいさんはどうしたんだろうな？」

ムッチは、おじいさんの家に行きました。

— ぬく —

⑤

おばあさん

「お米をすずめっこが食べてしまう。わたしにかまわず、田んぼに行ってください。」

おじいさん

「ばあさんの看病のほうが大事だ。なあに、人間そっくりのかかしをかわりにおいてあるからだいじょうぶだ。」

話を聞いたムッチは、はっとしました。

もしすずめがにせものの人間と見破ったら、おじいさんとおばあさんが大切に育てたお米を食べちゃう。よし、おにぎりをぬすんだつぐないに、おいらがお米を守ってやる！

ムッチは、急いで田んぼに向かいました。

— ぬく —

⑥

田んぼにもどってびっくり。すずめはかかしに目もくれず、お米をついばんでいます。

（大きい声で 伸ばして）

ムッチ

「おーい！ すずめくんたち、お米を食べるのまってよう！」

ムッチは、すずめたちにたのみましたが、いうことをきいてくれません。

その時、よい方法を思いつきました。

おいらが人間になりすましてやる。

— ぬく —

ムッチは、すずめたちに気づかれないよう
にかかしの中にもぐり、ゆすり始めました。
かかしが、ゆっさゆっさとゆれています。

— めく —

⑧

すずめ

「うわっ、人間が目をさました!」

すずめ

「早く逃げろっ!」

すずめたちが悲鳴をあげ、バタバタと飛びあがる羽音がきこえます。

— ぬきながら —

ムッチは、どんなにつかれようとも一時も休まないでゆらし続けました。

やがて、あたりが暗くなり、すずめの声
しなくなりました。

ムッチはゆするのをやめました。つかれは
てて動くことができません。かかしの竹の棒
につかまり、死んだように眠りました。

— ぬく —

つぎの朝。すずめの声で目をさました。
ぺこぺこのお腹で、また、かかしをゆすり
始めました。

— ぬく —

長い、長い時間がすぎました。あたりが薄暗く、ひっそりとしています。

ぐったりし、外に顔を出すと、おじいさんがやってきました。

でも、ムッチは逃げる力がありません。

おじいさん 「おや？ あのどろぼうさるじゃないか。ここで何をしておったんだ？」

おじいさんは、かたむいたかかしを見て、少しの間考えました。

おじいさん 「子ざるよ、まさか、この中でゆらし、ずずめを追っばらってくれていたといわないだろうね？」

ムッチはかすかに頭を縦にふりました。

おじいさん 「そうだったのか」
おじいさんはムッチをやさしくだきかかえ、耳もとでささやきました。

おじいさん 「おかげで、ばあさんはよくなったし、お米もぶじだ。ありがとう、ありがとうよのう」

稲刈りが終わりました。

ムッチは、とれたてのお米でおにぎりをにぎってもらいました。

（擬音語の声で）

モグモグモグモグ

ムッチ

「うまい、うまい。こんなうまいお米をつくるなんて、おじいさんとおばあさんはお米づくりの名人だね」

ムッチがほめると、

おばあさん
「おいしいおにぎりをこしらえるには、おいしいお米がいるからね」

おじいさん
「お米づくりほど楽しいことはないわい」
おばあさんとおじいさんが言いました。

（ほんの少し間をおき）

そうそう、あのすずめたちも稲刈りの後、田んぼに落ちているお米をおいしそうについばんでいましたよ。

（終わり）